

〔書 評〕

鈴木忠士 著

『カミュ『異邦人』の世界』

三 野 博 司

いまや 20 世紀の古典となったアルベール・カミュの『異邦人』は、原書のブランシュ叢書版で 171 ページ、プレイアッド叢書版では 85 ページ、邦訳のカミュ全集では 69 ページ、四百字詰原稿用紙に換算すると 200 枚足らずの短篇である。本書は、分量にして、『異邦人』の 3 倍半、700 枚を優に越える大論考であり、日本人が書いた『異邦人』論としてはもちろん、世界においてもおそらく、もっとも長大にして精細な論考であると思われる。

『異邦人』については、これまでさまざまな角度から、さまざまな方法によって、おびたしい解釈、分析が試みられてきた。こうした事態を、フィッチはかつて「『異邦人』産業」と呼んだが、フィッチ自身はその有力な振興者であった。本書は、これまでの『異邦人』研究史に十分な目くばりをきかせているが、「あとがき」によると、著者は、ひとまず論考を完成したあとで、書物としての出版を考慮して、研究書を収集し目を通したとのことである。研究書への言及はとりわけ「注」の部分で詳細に行なわれており、著者は「網羅的ではない」と述べているが、『異邦人』研究の全体像をうかがわせるにたる豊かなものである。また、これまでの解釈にたいする、鋭い指摘や論戦的な記述も見られる。ただ、著者の考察が、その出発点から、これまでの『異邦人』研究書との対話を繰り返す形で深められてきたのではなく、むしろ、それらとはまったく離れたところで独自に構築され、それが完成し固定した地点から、これまでの『異邦人』解釈を断罪しているのは残念に思われる。なるほど、著者の指摘は新鮮で、著者の立場に立つかぎり論旨は一貫していて乱れはないが、しかし、論考を進めてゆく過程で、他の研究書との対話のなかで自らの推論の基盤を問い直す契機がなかったことが、本書をきわめて独創的であ

りながら、いささか偏狭なものにしているのではないかと思われる。

本書の狙いは、きわめて精緻に、登場人物の、そして語り手の表層心理と深層心理を読みとっていこうとするものである。しかし、なんといっても四百字詰原稿用紙 200 枚足らずの作品である。与えられている情報はけっして多いとはいえない。そこでいきおい、登場人物のわずかな発話、たったひとつの行為から実に多くのものをひきだすことになる。その手際は実にあざやかであるが、情報が限られているうえに、傍証を得られないため、はたして著者の詳細な読みとりがどこまで正鵠を得ているのか、心もとない部分も生じてくる。主人公のたったひとつの行為を、著者は、表層心理から深層心理へといたる各層において複数の意味づけを試みてゆく。そのあまりに精緻な分析は、たしかに驚嘆すべきものだが、はたしてここで分析されているのはほんとうにムルソオなのだろうかとの素朴な疑問が生じてもくるだろう。

まず「序」において、著者は、「作品のテキストと読み手の私との間に織り成され、生成して止まないテキスト」を「生成するテキスト」と呼び、これだけを分析の対象にすると述べている。「生成するテキスト」という呼称は誤解を招きやすく、適切な呼称であるかどうか問題もあるだろう。とりわけ、著者が「序」の終りで、「私の方法は「著者」を問題にしていないし、また作品そのものではなくして、生成するテキストを対象としている」（傍点引用者）と述べるとき、あらためて、生成するテキストとは何かという疑問にとらえられる。これでは、生成するテキストとは、作品そのものから遊離した、読解者の主観的・恣意的解釈の同義語ととられる恐れがないだろうか。おそらく、著者は、何よりも、既成の解釈や予備知識にとらわれず、著者自身にとっての『異邦人』に忠実でありたいと願ったのだろう。そのために、著者は、作品から出発しながら、自己の論理にしたがって、あまりにも遠くへと分析を進めてしまうことをあえて辞さない。この著作には、『異邦人』一作に注ぎこまれた著者のすさまじいまでのエネルギーと情熱が感じとれる。このエネルギーは、しかし、ときに対象となった作品からあふれでて、『異邦人』そのものより著者自身を語ってしまうことも事実だろう。

さらに「序」によると、著者は、『異邦人』以外のカミュの作品、そして作者カミュの伝記的事実もすべて括弧のなかに入れるところから出発する。そして、テキストの明示的な部分＝表層の解釈に、行間に隠されている部分＝深層の解釈を重ね合わせることにより、重層的にムルソオ＝語り手の心的世界を把握しようと試み

る。この分析を順序に従って進めるために、著者は『異邦人』の世界を三つに分ける。まず名前をもつ人々の世界である親和的世界、次に名前をもたない人々の世界である敵対的世界。残るひとつは自然的世界である。ここで著者が言う自然とは、ムルソオをとりまく外的自然のみならず、それと相関的なかれの気分・気質を構成する内的自然をも意味している。この自然的世界の分析こそは、本書の眼目であり、分量的にも全体の3分の2を占めている。そして、前二者の親和的・敵対的世界が表層解釈の対象、残る自然的世界が深層解釈の対象とされる。だが、この三つの世界の呼称はいささか厳密を欠くものだろう。親和的世界と敵対的世界はともに他者が構成する世界であり、この他者の世界と自然の世界とが対立する（別の視点からは、親和的世界が自然的世界に通底することは認められるにしても）。そして自然的世界の内部にも、著者が生肯定的自然と生否定的自然の区分を設定しているように、親和的側面と敵対的側面があるだろう。それゆえ、著者の三つの世界の呼称の曖昧さは、親和的・敵対的がムルソオとの関係を意味する呼称であるのに、自然的の場合はそうではないというレベルのずれに由来するものではないだろうか。

「序」のあと、本文は五つの章に分けられている。まず「Ⅰ 親和的世界とその住人」では、セレスト、レエモン、サンテス、トマ・ベレについて、かれらの人物像とムルソオとの関係について分析が進められる。とりわけ、レエモンとムルソオとの会話を仔細に検討し、ムルソオが、一般に言われているほど無関心で受動的態度に終始しているのではなく、むしろ積極的に自己の判断と意志にもとづいて行動している一面もあることが指摘されているのは注目し得る。

次の「Ⅱ 親和的世界から敵対的世界へ」においては、敵対的世界との衝突を回避するムルソオの四つの手段——友好的身振り、親和的幻想の投影、一般的視点に立つこと、自己不在化——の分析が展開されるが、これはきわめて示唆に富んだものである。

続く「Ⅲ 敵対的世界とその住人」においては、この住人たちのムルソオを「理解しよう」とする態度が実は「支配」の欲求の表われであるとする卓越した論点から、社長、門番、予審判事、検事、弁護士、司祭らに言及される。ただ、ここでの門番の解釈には疑問が残る。門番が敵対的世界が恒常的に張りめぐらしている監視の視線であるというとならえかたは、うがちすぎというものだろう。かれはただ単純に門番としての職務をはたしているにすぎない。それに、法廷において、門番がムルソオにとって不利な証言をするとき、著者はそれを「裏切り」と言うが、はじめ

から門番が敵対的世界の監視者であるという著者の前提に立つなら、これは裏切りではなくて当然の行為だということになるだろう。

「IV 親和的世界から自然的世界へ」では、「愛」が問題となる。だが、なぜ、親和的世界から自然的世界へという表題のもとで「愛」についての分析がなされるのかについて説明がないのは、不満が残る。ここでは、マリーとムルソオ、サラマノとその飼犬、ムルソオと母、若い囚人とその母、の4組の愛について分析がなされるが、なかでも、マリーとムルソオの愛をめぐって両者の心理のすれ違いを精妙にたどる過程には、著者の本領が感じられる。

「V 自然的世界」は、これだけで本書の3分の2を占め、著者の独創性が存分に発揮されている章であるが、同時に、あまりに精細にムルソオ＝語り手の深層心理が分析されるのをたどるうちに、『異邦人』とは別の、もうひとつのフィクションを読んでいるような気持ちになるのも確かである。また、精神分析理論に味い評者としては、その当否を論ずる力はないが、ただ『異邦人』の一読者の立場から言うなら、ムルソオの性格の特徴を精神分析の症例に還元するに終っているという印象を避けたい。これは本書の方法ともかかわってくることだが、作者と他の作品をいっさい括弧に入れて、ただ『異邦人』だけを対象に、ムルソオ＝語り手の深層心理の分析を試みる著者のねらいが、いまひとつ明らかでないように思われる。たしかに本書はムルソオについての新しい認識をもたらしてくれるが、それ以上に、そうした分析を通して、作者カミュの創作の秘密や時代の意識の深層（本書のなかでも、アラブ人についての分析はこうした領域に分け入っているが）を明らかにしてくれるわけではない。もちろん、著者のねらいが最初からそうした領域をめざしていないのだから、それを要求するほうが無理というものだが、しかし、この第V章を読んでいて、次第に閉塞的な場所に導かれていく印象をもつのも事実である。

第V章は、「予備的考察」のあと、「1 生と死の弁証法」、その「A 生肯定的自然」と「B 生否定的自然」において、ムルソオ＝語り手の「気分」に現われる自然的世界が、生と死の二つの相のもとに、精緻に記述される。この記述は、たしかに著者自身も認めているように煩瑣ではあるが、網羅的であるだけに、資料としての価値も貴重である。（このことは本書全体についても言えることであり、その列挙的、網羅的記述は、読者にとっては読みづらいが、今後の『異邦人』研究にきわめて有効な資料を提供してくれるものだろう。）続く「C 生と死の統合」では、死刑判決が下されたあと、死の受容にいたるまでのムルソオの心的過程がこれまた精

緻に追跡される。ただ、独房に移されたムルソオが空ばかり眺めているのに、「彼の心は自然に向かわ」と解釈するのは、うがちすぎた見方ではないかと思われる。次に、著者は、『異邦人』の研究者たちを悩ましかつ魅惑してきたこの作品のきわめて独創的で不可思議な「語り」について、独自の見解を提示する。まず、著者は、『異邦人』の終りではムルソオが物語の成立しない時間のなかにいるとして、「ムルソオが語られている出来事を生き通した後に物語全体を書いたのだと推定する説」や、『異邦人』の語りはムルソオが「再び生き直す」場としての「文学的創造」であるという説を、「見当違い」としてしりぞける。そして、ムルソオの語りは、「誰に対してでもなければ、何のためにでもなく」語られる「永遠の独語」であり、「本来的には、ありえない語り、語りではない語り」だと結論づける。なるほど魅力的な解釈ではあるが、この場合には、ムルソオの語りに見られるきわめて意識的な構成、第一部と第二部においての語り技法の使い分けを始めとする細部にいたるまでの配慮を説明することが困難となるだろう。著者自身、ムルソオの語りに意識的な「取捨選択」があり「方針」があることを先に認めている。ムルソオの語りは、やはり何かの目的にそってなされているのではないか。がいずれにしても、この語りには曖昧さがつきまとう。永遠の魅惑的な謎であることはまちがいない。

続く「2 死の願望と死の不安」では、ムルソオの無意識裡にひそむ、死の願望と表裏の関係にある死の不安を、かれが自他の身体にたいしてもつ意識の諸相を記述することによって浮かびあがらせようとの試みがなされる。「A ムルソオの身体像」では、その名の通りムルソオの身体が、「3 異形の身体」では老人とアラブ人の身体が、「C 生命的身体」ではマリーの身体がそれぞれ、ムルソオ＝語り手によってどのように描写され、提示されているかを詳細に分析し、そこに語り手の死の不安を読みとろうとする。ここでは、とりわけアラブ人についての分析が刮目に価する。これまでアラブ人については多くが語られてこなかっただけに、この精緻で深い洞察は貴重な価値をもつと思われる。ただ、このAからCにおいて、著者の推論の基盤となっているのは、「対象の身体をその具体的特徴を剝奪して表象することは死の不安を回避する心の術策である」とする考え方であるが、はたしてこれを、一般的に認めることができるのだろうかという疑問は残る。

次の「D 共生的身体」では、ムルソオの母の抽象的身体が問題とされる。著者はますます精神分析への傾斜を強め、非力の評者としては判断に苦しむところであ

る。ムルソオの母子一体幻想を精細に描きつくす推論はみごとだが、『異邦人』のテキストが背景にしりぞいてしまい、著者の描きだす「怨霊としての母」がマリーに憑依するという指摘にいたっては、まるでフィクションを読んでいるような気にさせられる。

最後の「E メランコリー」では、すでに述べたように、ムルソオの性格の特徴を精神病の症例に還元することへの疑問が生ずるし、やはり「母の霊が事物に憑依する」という指摘にはとまどいをおぼえる。レエモンの「甘え」とそれにたいするムルソオの寛容の指摘は納得できるにしても、それを「幻想の母子関係」とまで呼ぶには、いささか資料が不足しているのではないだろうか。ともあれ、これらの疑問点は、精神分析理論に味い一読者の疑問であることをあらためて強調しておき、専門家の判断を期待したいと思う。ただ、ムルソオがアラブ人の身動きしない身体になお4発撃つのは、「小児化」したムルソオが、「本当に動かないのかどうか確かめようとして、ひょっとしたら衝撃で生き返るのではないかとも思って」、残りの弾丸のすべてを機械的に撃ち込んでみたのだとする解釈は、驚くほどに新鮮で興味深いものである。

以上で、本書の分析は終わっているが、ただ「あとがき」によれば、すでに「続稿」が用意されているとのことであり、さらに長大な論考になることが予想され、評者の判断も、「続稿」によって修正をよぎなくされるかもしれない。この長大な論考を読み通すことは容易なことではないし、煩瑣な心理分析をたどるには忍耐力を要しすぎるだろう。しかし『異邦人』に関心をもつ者なら、ぜひ一読すべきである。このような読解も可能であったのかとの、新鮮な驚きにとらえられることはまちがいないだろうし、この独創的で精緻な考察に満ちた書物を抜きにして、今後『異邦人』研究を語ることはできないだろう。

(岐阜経済大学研究叢書2, 法律文化社刊, 1986年, A5判, 316ページ)